

# 中等教育の学校現場から見た生徒の学力

高橋 均

## 1. 生徒・学生に感じる危機感

私は中学と高校の中等教育という学校現場から現状をお話します。中等教育ということに携わっていて、最近、危機感を感じています。それは子どもたちと普段生活している中で、「子どもたちの精神的荒廃」を感じます。精神的に弱い子が増えているのではないのでしょうか。不登校生徒が増加しているということもそれに関連するのかなというふうに思っています。不登校生徒もそうですが、不登校になりかけている生徒も非常に多くなっているというのが現状であろうと思います。

また、子どもたちを見てみると、学校ではいろんな生徒会活動などがあるわけですが、そういう活動を通して見ても、何か情熱に欠けるといいますか、不活発といえますか、反応がすぐに返ってこない、そのような様子がかがわれます。

さらに、この臨床センターの分室として本校に「ほっとルーム」という部屋があります。私もそこに携わっておりまして、心に悩みのある子が入ってくるわけです。そういう子たちとふれあう中であらためて気がつくのですが、この子たちの人間関係づくりが非常に下手で、さらにいえば自分が言いたいことをうまく表現できない、自己主張ができないのです。

それは氷山の一角でありまして、たぶんもっとたくさん子ども達がこのようなケースに入るのではないかと思います。さらに言えば、そういう子たちが多いと学校の中でうまく社会が作れないという現状があります。また、佐藤学先生が「学びからの逃走」ということをおっしゃっていましたが、まさしく逃走される授業も最近増えてきているようです。今まででは考えられなかったことが日常のなかでも出てきたということです。

それと、大学生と接することがあるんですが、大学生の質が低下してきているなと思います。たとえば卒業論、あるいは修士論文を書くのに私どもの学校にアンケートを取りにきます。これはだいたいその時期が近

づいて、2、3週間前に調査をお願いしますというように来ることがあります。そういうのはだいたい会議でダメだということになるのですが、ぱっと断るわけにもいきませんので本人を呼んで話をしたりします。それで、何でもこういうことが必要なのかという話をしていくと、だんだん言葉につまんでしまわなくなります。結局何をやるかわからないという話になっていってしまう。大学生が何をやるかわからない、自分でテーマを決められない、そういう学生が増えてきているように思うのです。そういう大学生を見てみると、自主性だとか適応力もたぶん低下してきているのではないかなというふうに私は感じます。

さらに言えば大学を卒業して社会人になったときの危機感を、私は感じます。大学を卒業してもすぐに会社などで使えないという大学生が増えてきています。それから、子どもの数が減ってきてはいるけれども、受験至上主義というのはまだ強いわけで、それが社会全体に浸透している。その煽りを受けて、学校の授業も内容を深めていくという授業が少なくなっているのではないのでしょうか。

また、教師も変わってきていると思います。教師集団にも若い世代がどんどん入ってくるわけですが、若い先生たちはやはり体験とか経験すべきことをしていないのではないかと思います。教師集団も変わってきている、その辺もやはりこれからは考えていかなければいけない部分ではないかなというふうに思っております。そういうようなことを思いながら子ども達や学生に危機感を感じているわけです。

## 2. 数学の授業に見る生徒の変化

私は数学の教師ですので、数学の授業から子どもたちの変わり方というようなことをお話ししたいと思います。普段授業をやっておりまして、子どもを指名して、黒板で発表させるという活動が多くあります。机間巡視すると言いますが、ぱっと見て、特定の子どもの指名するのは、その子がいい反応をしているからです。その答えがあっているかどうかということとは別な観

点です。けれども、子どもたちはそれにこだわるんです。

まず聞くことは何かというと、「先生これあつて？」「これでいい？」そういう聞き方をします。自分がやったものを人に見せるとか発表するとか、表現をすることを嫌うんです。要するに失敗するというのを恐れる子が増えてきているような気がしてならないんです。これはやはり先ほど「受験至上主義」と言いましたけれども、効率を重視している受験勉強というものが子どもたちのなかに浸透してしまっているのではないのでしょうか。つまり、すぐ正解を得たいというようなことになってしまう。

数学は、必ずしも答えが一つになるわけでもなく、例え一つであっても、それにたどり着く道はいっぱいあるわけです。そういうことを無視している子が非常に増えてきているような気がします。また、すぐにあきらめてしまう。「わからなくなっちゃっていいや」という感覚があるんです。集中して何かに取り組んでいくということにも欠けているような気がします。何か課題を出したときに、本当だったらこの課題にはもっといろいろ考えてくれるはずなのに、子どもが自分で工夫するはずなのに、というようなことがこの頃よくある。一方、試行錯誤を繰り返して、工夫をしていくというようなことは少なくなってきているように思うのです。

十数年前に、こんな授業をしたことがあります。「正四面体と正四角錐があります。この2つの立体の辺の長さはみな等しい。したがって、正四面体の正三角形と正四角錐の側面の正三角形は合同です。頭の中でイメージできましたか。今、この2つの立体を合同な正三角形の部分でぴったり張り合わせます。さて、何面体になりますか。」この課題を提示して、後は生徒の反応を見ました。みなさんもちよつと考えてみて下さい。

生徒は頭の中で一生懸命考える。でも、なかなかイメージしにくい。そこで、見取り図を書いたり、展開図を作ったり、工夫を始める。そして、ノートの手端を切って、正四面体と正四角錐を実際に作って確かめようとする。これがきっかけとなって、模型づくりが始まる。五面体になることは一見予想がつかないが、模型を作れば一応納得する。しかし、証明にはなっていない。課題は発展し、模型を利用して証明を考えてみようということになる。その時の子ども達が考えた証明方法は40通り近くもありました。

最近、同じ課題で授業を試みましたが、昔のようにはいかない。五面体になることには驚くが、自分から模型を作ろうとはしない。答えが出ればそれでおしま

い。証明しようというふうにはならないのです。これは生活の中でもそうなのですが、「作業をする」ことを非常に嫌う、というよりも、経験がない。工夫するとか、作業を自分でやっていくというのが、自然にできる子が少なくなってきているという感じがしています。確かにテストで点数は取るんですが、それが本当に分かっているのかという疑問を感じるのです。要するに、本当に腑に落ちるといふか、感情で納得するという状態が子どもたちから感じられないことが多いんです。

本校では、20年以上前から標準化された数学のテストをほとんど同じ問題で経年的に実施しています。その結果はきちんとした形で分析しておりませんが、そんなに大きな変化はないようです。でも、授業を見ると、前に述べたように違ってきている。生徒達が試行錯誤を繰り返して、感情で納得し、分かったというような授業が減ってきている。

私は学力低下の問題は、ペーパーテストの点だけで考えるというよりも、自分で考える力と言いましょか、学ぶ力と言いましょか、あるいは何か興味とか関心あるものを見つけたす力、そういう力の低下にあると思います。そこが学力低下問題の本質ではないかなと思うのです。言い換えれば、自分で自分の進路を考えていく、自分の人生を考えられるという子どもたちを中等教育の中では作っていききたいというふうに思っているわけですが、それには、自分で考える力とか、いろんなことに興味・関心を持って行って、その中から自分でいろんなことを見つけたしていくという力が絶対に必要になってくるわけです。

### 3. 総合的学習への期待

今、新指導要領で「総合的学習」ということが目玉で上がってきておりますけれども、現場の先生方はこれをどうしたらいいのかということで悩んでいる先生方が大勢いらっしゃるし、あるいはもうやり始めている先生方もいらっしゃるのではないかと思います。私はこれは、学力低下問題を考えるちょうどいい機会、学力低下を歯止めしていくようなものとして総合的学習を私たち現場が見直していく必要があるのかなというふうに思うのです。

つまり、総合的学習なんかやっていると学力低下はさらに進んでいってしまうということもよく言われていますけれども、それは我々のやり方しだいで変わっていくのではないかなと思うわけです。子ども達が学んだ知識や体験を実際に生かせる場面を設定し

てあげる。そこで学ぶ意義を感じさせ、また、その中で知識や体験を定着させていく、そのような総合的学習というものを考えていく必要があるのではないかなと思います。

また、ここで考える総合は「内的総合化」ということを考える必要があるのではないかなと思います。これは、総合というのが単なるクロス・カリキュラムで終わってしまうことがよくあるわけですが、そうではなくて、子どもたちが今まで学習してきた内容とか、あるいは子ども達が自ら体験してきたことが子ども達のなかではばらばらになっていて、それが何か一つにまとまって出ていかない。それでは困る。それらを子ども達が自らの中に一つに総合化していく、そして、一個人として体系化して内面化をはかっていく、それがいわゆる人格を形成していくことであろうと思うのです。それを内的総合化と考えているわけです。子ども達個人の中の総合化と言いましょうか、そういう見方を持つ必要がある。一般には、あまりにも子どもの外でこの教科とこの教科を合化するとか、この教科の内容とこの教科の内容でクロスできるからそういうカリキュラムを考えましようとかというような発想になってしまっていることが多いです。内的総合化を考えていけば、結果的にクロスするのは当たり前だろうと思うのです。

それと、総合的学習を成立させていくためには、基礎的な力というのがすごく必要になってくるだろうと思うんです。総合的な学習という場面を設定したときに、子どもたちがこういう学習が必要になってくるということをそこで気がついてほしい、そこで改めてやりなおしていくというようなことが総合的学習の中では当然なされていくのであろうと思うわけです。いずれにしても僕は数学の教師ですから、総合的学習という時間以外に、数学の授業の中でもやはりこの総合ということを取り入れていく必要があるんだろうと思います。今までの指導方法ではだめなのではないか、また、教材も工夫する必要があるだろうと思います。今、そういうようなことを学校現場から考えています。

本論文は、2000年度公開シンポジウム（2000年12月16日）に話題提供され、学校臨床総合教育研究センター年報『ネットワーク第3号』（2001年3月31日発行、Pp 39-41）に掲載されたものである。